低学年 児童期の学習

～保護者のみなさまへ～

第11回 こんな勉強は禁物！ ～学力伸長を妨げる勉強法～

小学生の学力形成で配慮すべきは、「まだいろいろな面で完成途上にある子どもの学習だ」ということです。特に学習に受験がからんでくると、大人は早めに子どもを追い込んで見通しを立てようとしがちです。その結果、子どもにふさわしくない勉強を押しつけてしまい、伸びる芽を摘み取ってしまうという生憎な結果を招くこともあります。

では、具体的にはどのような勉強が望ましくないのでしょうか？ このような趣旨にもとづく情報が提供されることはあまりないと思いますので、低学年児童の保護者で先々中学受験を視野に入れておられるかたの参考にしていただければ幸いです。

1 計算や漢字などの学習にひたすら取り組む。

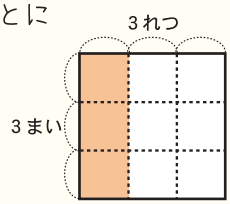
低学年時の算数学習の柱は基礎計算力の習得です。しかし、こういった方面の学習のみに偏るのは望ましくありません。計算技能は、**計算式を自分で編み出す力**を伴ってこそ役立つものだからです。つまり、実際場面での数のもつ意味を理解する力を養うことにも留意する必要があります。同じような計算練習を繰り返してスキルアップすることは重要ですが、それは算数学習の一部なのだと思ってください（ほかにどんな学習が必要かは、つぎの2でお伝えします）。

同じことは漢字学習にも言えます。漢字を繰り返し書いて覚えても読解力には反映されません。漢字は、文中に使用されている場面を通して、その意味や使用法も一緒に学ぶほうが効果的です。少なくとも、漢字は用例と一緒に学習するほうが国語の能力向上につながるでしょう。

2 「面積＝縦 × 横」のように、パターンを覚え込む。

算数のおもしろさは、**数に関わる状況の仕組み**や**規則性**を見出し、**課題に対する回答を単純な計算式で表す**ところにあります。中学入試でもそういう能力が問われています。すなわち、簡単な公式を自分で編み出すのが算数学習の本質です。この経験を十分に積み重ねたうえで公式を適用した学習に発展するのが望ましい流れです。

たとえば、「面積は縦 × 横」のようにパターンを覚え、解答を引き出すことに重点を置いた学習に偏ると、文章題などで面積を問う課題かどうかの判断が必要な場合、答えることができません。「広さとはどういうものか」「なぜ面積が縦 × 横で求められるのか」をまずは理解することが先決です。



3 確かな黙読力を身につけないまま上の学年に進んでしまう。

低学年期の子どもにとって重要なのは、確かな黙読力を培うことです。多くの保護者は、子どもの幼児期から活字に触れさせておられるため、**「うちの子はちゃんと読める」**と思っておられますが、実は個々の読みの力（黙読力）には相当個人差があります。全ての教科の学習は文字を読むことを通して行われますから、読みの力が成果に大きな影響を及ぼします。

では、確かな黙読力はどうやって身につくのでしょうか。それは、文字とそれに対応する音の照合作業、すなわち音読のたゆまぬ積み重ねによって養われます。音読が上手になるにつれて、文字の連なりを目で捉えた瞬間に区切り目や繋がりを認識し、声に出さずとも脳内で読みの音声をイメージして理解できるようになっていきます（２年生になる頃）。この経験が足りないまま上の学年に進むと、読みに時間を要する、読んでも理解が不十分、といった問題を抱えることになりがちです。

4 受け身の学習姿勢を早くから染みつかせてしまう。

小学校低～中学年の子どもは、基本的に**親に生活の全てを頼って生きています。**親に必要なのは、未熟な子どもに最小限の指示やサポートをしてやりながら、少しずつ自立させていくことです。親が何につけ取り仕切ってやらせると、子どもの自立はどんどん遅れてしまいます。特に、叱ってやらせる勉強を繰り返していると、親の顔色を窺う姿勢が染みついてしまいます。また、勉強の面白味に惹かれて取り組むのではなく、親を満足させるために取り組む姿勢が染みつき、先々の飛躍に向けた展望も厳しいものになる恐れがあります。

また、習いごとや塾通いが毎日のように続くと、時間を自らが支配する主体性が育たず、時間に追われ時間に支配される受け身の姿勢の人間になってしまう懸念も生じます。これも自立した勉強への移行を妨げることになりますので、気をつけたいものです。

5 早くからテスト主義、成績主義の勉強に走る。

親が**「先に中学受験ありき」**といった発想に取り憑かれると、子どもの勉強のすべてが「学力・人間形成」という視点から外れ、「勉強は、テスト対応力を養うためのもの」といった観念に支配されがちです。そういう親の姿勢は、子どもの勉強の取り組みにてきめんに反映されてしまいます。

塾で授業をしていると、考えかたの説明をしている最中に「先生、早く答えを言ってください」という子どもがいます。テストの成績や順位に異常なほど敏感な子どもがいます。これらは、テスト主義・成績主義に染まった残念な例です。こうした姿勢が染みつくと、純粋な好奇心や向上心がどこかへ消え去り、自分に得になることしかしない人間になりかねません。高い次元で学問を修めていく人間には成長できないのではないでしょうか。

児童期までの子どもの学習を通して養っておきたいのは、「勉強とは自分にとって必要なものだ」「勉強は辛い面もあるが、やり遂げたときの気持ちよさはほかでは得られないほどだ」といった、勉強に対する肯定的な受け止めかたです。低学年の段階からこうした点に配慮しながらお子さんを見守りサポートしてあげてください。そうすれば、中学受験でメンタルにダメージを受けることはありませんし、**中学進学後も熱心に学び続ける人間**へと成長していけるでしょう。